



| | |
|------------------|---|
| Title | われわれの大学はどんな課題で21世紀に入るのか |
| Author(s) | 朴, 寿鎬 |
| Citation | 北海道大學教育學部紀要, 80, 19-23 |
| Issue Date | 2000-03 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/29604 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 80_P19-23.pdf |



[Instructions for use](#)

われわれの大学はどんな課題で 21 世紀に入るのか

朴 寿 鎬

ABSTRACT BOK, Ziu Kou, *The issues facing universities in the 21st century. In spite of the fact that education and economy (as well as culture) are interdependent, changes have been occurring in different dimensions. As a consequence of the unbalance of the development of these two aspects, ten years after the collapse of the Soviet Union, Russia is facing new social problems, including serious educational ones. Now it is time for Russian educators to learn from the Japanese how to 'educate' people for the coming century.*

I. はじめに

このテーマはあまりに大きくて、私のような者が一人で全部の課題を解くことは勿論出来ないことです。そして国によって教育学の課題にも特徴があると思います。ですから私はこの大きな問題に対する、ささやかな自分の意見を言わせていただきたい。今後、21 世紀に入る新ロシアの教育はいかに在るべきか、また、その際、学校、家庭、社会の役割は如何にあるべきか、世界の教育からどんなことを学ぶべきか等について考えて見たいのです。

II. なぜ日本の教育に対する関心が高いのか？

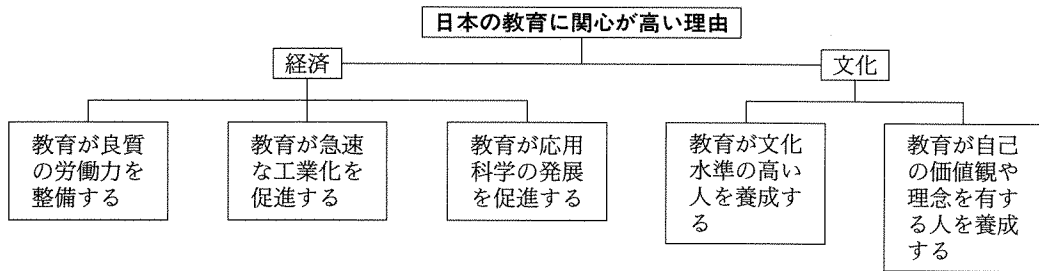
日本の教育に対して世界の国々からの関心が高まっている。

その理由はいろいろあります。例えば欧米諸国の日本の教育に対する関心の高まりの理由はなによりも日本の経済的成功だと言われています。東京大学名誉教授の天野郁夫氏はこの点について次のように書いています。「明治以来の日本の急速な工業化を説明する重要な要因のひとつが教育にあることは、1960 年代に入る頃から、欧米の社会学者、とくに経済学者によって繰り返し指摘されてきたところである。その教育の重要性が、日本経済がさらに成長を続け、強化した生産力、輸出力が欧米諸国との間に、さまざまな摩擦や軋轢を生むようになった 1980 年代に、あらためて注目を集め、脚光を浴びるようになったのである。」⁽¹⁾

ロシアで日本の教育に対して関心が高い理由は、私の考えでは、経済よりも文化と関連してであると思います。先輩を尊敬し、約束と規律を守り、人に迷惑をかけない、そして国と親を愛する、文化水準の高い日本人を育てる教育である。日本の高度な教育によって子供たちは、自己の価値観や理念を作り上げていくことができるので、日本には素晴らしい教育システムがあると知っている人がロシアには多い。その人たちは「まさに日本は教育立国である」との信念をもっています。

理由は次の通りです。(図-1)

〈図1〉日本の教育に関心が高い理由



III. 教育と経済

経済というものは人が創造するものであります。人と人の間にできるものです。ですから教育が、良質の労働力を有し、そして工業化の速度や科学を進展させられる知識を持っている人間を育てなかつたなら、どの国でも経済は発展しません。

例としてロシアの経済を見ましょう。1992年、ロシアは急激な「ショック療法」により、準備もせずに、また、市場経済の知識のある人間の養成もせずに、計画経済から市場経済に移行しようとして失敗しました。私はその時、「人々に市場経済に対しての知識もあたえず、市場経済システムへの良質な労働力も整備しないで市場経済に移行するのは、プールに水も準備しないで飛び降り台から飛ぶのと同じだ」と北海道新聞に論文を書きました。価格自由化政策の結果、物価は1年で26倍に跳ね上がる一方、政権の支持率は瞬く間に低下し、1992年の2月にモスクワで政府の経済政策に反対する集会が開催され、12万人が参加しました。この例を見ただけでも教育と経済がどんなに深い関係があるかということがよくわかります。しかし残念ながら、ロシアの教育学者の経済に対する発言は全然聞かれませんでした。

日本では教育と経済との関係がとても大きいと私は思います。私は、日本では色々な教育大学や教育学部で教育学者と経済学者と一緒に働いているのを見て、いつも羨ましく思っています。北大の教育学部も同じであります。

ロシアではなぜ教育学と経済学がそんなに遠く離れていたのでしょうか？ロシアの社会学者の中では社会分業論というのが広く行き渡っています。その理論は、簡単に見ると、社会にはいろいろな専門の分野があるので、各々自分の専門に対する仕事をするべきだと言うことです。例えばパン屋はパンを作り、靴屋は靴を作る。パン屋が靴を作ったら大変だ。どんな靴が出来るのか？ですから、教育学は教育を研究し、経済学は経済を研究するのである。教育は経済には何も関係がないということです。旧ソ連時代に教育大学で一番人気のない学者は経済学者でした。経済学者である私は教育大学で20年以上働いてきましたが、その間、何度も「教育大学で何をしているのか？」と聞かれたことが有りました。21世紀には私の考えでは教育と経済の関係はもっと密接になると思います。そして「教経学」とでもいう新しい学問分野ができるかもしれません。

IV. 教育と文化

「教育」という言葉は「教える」と「育てる」という二つの言葉からできています。ところが旧ソ連の教育学は「教える」ことの他に、特に「育てる」という言葉に大きな関心を払ってき

ました。ですから共産主義的訓育が教育学の課程の第一に注目されていました。しかし、ソ連という国がなくなり、共産主義的訓育の人気のない現代ロシア教育学の課程に対しては色々な意見があります。けれども教育学の課程は人を育てる問題に深く関係があると確信しているロシアの人たちが、文化水準の高い人を育てる日本の教育に関心を高めるのは勿論です。ロシアでは例えばゴミなどで汚れた道路を見たら、「これは駄目だ。日本にこんな所はない」とか、「日本人に見られたら恥かしい」と言います。1945年の戦後からサハリンに住んでいるロシアの人たちは、日本時代の樺太には家に錠が無く、泥棒というものを日本の人たちは全然しらなかったと言っています。現代のロシア教育は、共産主義的訓育を廃止しましたが、その代わりになる訓育にかんする構想は何もできていないため、「教えて」はいるけれど「育てる」ことに対しては今のところ疑問が答えよりも多いのです。しかし、教育が人を教えるばかりで人を育てなかったなら、社会の文化水準を高めることはできないでしょう。

V. 経済と教育のバランス

ところが人生は一つの場所に黙って止まっているのではありません。世界では激しい経済競争が行われています。21世紀にはこの競争がもっと激しくなると思います。実際に教育が今まで経済発展を促進する良質の労働力を整備することが出来て、21世紀もその役割を続けて行くためには、教育改革が必要だと思います。なぜかと言うと、教育は経済に比べれば保守的だからです。経済は今日、色々な新しい教育に関係のある社会問題を生みだしています。しかし、教育学は保守的ですから経済の後をついて行けないのです。例えば拝金主義の問題です。

経済は人が創造する。そして経済は人のために創造される。人の暮らしを良くするためには経済発展が必要です。しかし暮らしを良くするにはお金が必要です。昔は「腹が減っては戦さが出来ぬ」と言いましたが、今日の世の中では「金がなければ生活が出来ない」と言えると思います。ですから市場経済は必ず拝金主義を生みます。

今ロシアの経済は先進国の後を追って市場経済に移行しています。しかし市場経済の基本もまだしっかり出来ていないのに、ロシアの経済は拝金主義の病気にかかりました。勿論、この拝金主義は、多かれ少なかれどこにでもはびこっています。落合信彦氏は次のように書いています。「しかし、この拝金主義も、国家が近代化していく上で通らねばならない、ひとつのプロセスではないのか。かつてのアメリカ、イギリス、フランスみなそうだった。その拝金主義への反動として、さまざまなかたちのヒューマンイズム運動が生まれて、バランスをとってきた。」⁽²⁾

もしロシアが、今日、また昔の様に共産主義的に拝金主義に反動し始めたら、国はまた、昔の様に共産党体制に戻ります。拝金主義の病気を治療するには民主主義的方法でなければいけません。そのためには教育学の力が必要です。

ですから21世紀には、日本やロシアばかりでなく他の国でも、経済と教育のバランスを作り、拝金主義が国民の心の腐敗や社会の荒廃の理由にならないようにしなければなりません。欧米の諸国には民主主義が根付いていますし、キリスト教を基礎にしたモラルティがありますが、ロシアはその方面がまだ弱く、民主主義も踏み出したばかりですから、教育の役割は大きいと思います。

拝金主義とならんで、ロシアにはもう一つの社会病が出来ました。それは拝金主義です。親たちは子供の小さい時から一番よい物を自分の子供に与えるために力をつけています。一番

良い幼稚園、一番人気のある高等学校、一番有名な大学、一番名門の学部を選びます。それには勿論お金がかかります。しかし親たちは出来ないことを無理にしながら、お互いに激しい競争を作りながら、自分の子供に立派な知識を持たせるつもりで一生懸命です。どうしたわけか、知識さえあれば人は世間に出て幸福になれると思っている親たちがロシアには多いのです。しかし、世の中と言うものはパラドックスが多い。知識が有るからといって必ず幸せになるものではない。そして有名な大学だからといって学生たち全部が一生懸命勉強して知識を持ちたいと思っているわけではありません。ロシアには「馬を水まで連れて行くことはできる。しかし馬に飲みたくない水を飲ませることは出来ない。」と言う諺があります。その様にロシアの大学生の中には「知識があるかないかが問題なのではない。問題はもししたら試験に良い点数をつけてもらうことができるのかである。」と言うような考え方が広がっています。そのために、今ロシアの学校では、点数問題で先生と生徒の間に複雑な関係がおきています。

拝金主義とか拝点主義が20世紀に個人主義の強い若者を作り始めました。ですから如何にしたらこんな拝金主義、拝点主義、個人主義が国民の心を腐敗させない、社会を荒廃させないようにする問題が21世紀の教育学に対する課題の一つだと私は思います。

イギリスのロナルド・ドーア氏の「21世紀は個人主義の時代か」⁽³⁾という本を読むと、この問題が世界的に重要な問題であることがわかります。

R・ドーア氏は次のように書いています。「日本人は、東洋思想と日本国体の固有の性格を正しく理解することによって、個人主義が直面した行き詰まりから、全人類が抜け出す道を見つけるのを助けることができる。」⁽⁴⁾

実際そうであります。ロシアの人たちが日本の教育に関心を高めるのは、日本人の文化水準が高いからだと言いました。R・ドーアの言葉もその確認の一つであります。

R・ドーア氏はまた、この様にも言っています。「西欧も日本と同様、混乱に陥っているが、それは個人主義の理論的延長である社会主義、無政府主義、共産主義が、ファシスト全体主義という反応を呼び起こし、それが伝統的個人主義を葬り去ろうとしているからである。」⁽⁵⁾

長い間、ソ連共産党政権の下で過ごしてきたロシア人は、R・ドーア氏の挙げている色々な主義の影響が強い。そしてロシアは今、民主主義に足をふみだしています。しかし、民主主義の実体は知らないから、民主主義とは何でも自分の好きなことが出来ると考えています。これも個人主義の一種であると思います。

IV. 人間を育てる教育

新しい民主主義国家のためにはどんな教育をしたら、知識と文化水準の高い若者たちを育てることが出来るのか、と考える学者たちが今ロシアではだんだん多くなりました。そんな考えをもっている何人かの学者が1991年、ユジノサハリンスク国立教育大学に東洋学部を創設することにしました。

「東洋学部」という名前をつけたのは、この学部が、学生たちが日本、韓国、中国等の東洋に関する科目を学ぶばかりでなく、ロシアの若者にロシア文化以外の東洋の文化を教える学校であるという意味からです。そして教師たちは、学生たちが授業に遅れないようにすること、先生に挨拶をすること、教室を散らかさないで自分で後かたづけをきちんとすること、ガムの食べかすを何処でも勝手に捨てないこと、禁止されているところでタバコを吸わないこと等、家

庭や学校で最後まで教えられなかったことを教えています。この学部の教育構想は「専門家となる前に人間となれ」という理念をもとにして作られています。ロシアの人々の中でこんなことがよくいわれています。「皆が必ず詩人にならなくてもよいが、必ず皆が人間にはならなければいけない」。卒業生全部が立派な専門家になれないかも知らないが、みんなが立派な人間になってほしいと私たちは思っています。ところが問題は「立派な人間教育」とはどんな教育であるか？ ということです。旧ソ連の教育学にはこの問題に対して画然とした答えがありました。が、ロシア教育学にはまだ具体的な定義はありません。ですから私たちはアメリカ、日本、韓国、中国などの教育学を研究して答を探しています。私たちのように考える学校が、今日、ロシアのいろいろな都市に現れてきました。

私たちの10年近い仕事には光も影もありました。その影の第一は学生を養成する方法です。大学生はもう成人です。そんな人たちに行儀作法について注意するのは本当に難しいことです。しかし家庭や学校で行儀に関する良い教育を受けられなかった若者たちがいかにしてやっつけば民主主義的に彼らを育てられるのか。こういう問題がたくさん出てきました。日本の教育学者には人間教育に関する豊かな経験があります。ですから20世紀に始まった人間教育が各国に注目され、それが21世紀の教育に対する課題の一つになると思います。

これに対して日本の教育の役割が大きいと思います。私はその経験を学び、私たちの学校で人間教育に力を入れたいと思っています。

VII. ま と め

私は21世紀教育学の課題として次のような問題に注目したいと思います。

1. 人間教育の歩みを重要な課題とする。
2. 教育と経済の関係をますます緊密にする。
3. 教育と文化の関係を修正する。その時世界文化と民族文化の相互関係を忘れてはいけない。外国文化の発展のために民族文化に損害を与えてはいけない。
4. 拝金主義、拝点主義、個人主義等を克服する教育に力をつくす。
5. 教育家や学生の国際交流を発展させる。
6. 新しい民主主義的な先生と学生との関係を作り出す。
7. 教育関係の国際交流を発展させ、諸国の研究者が協力して社会における教育の役割をもっと高める。

注

- (1) 天野郁夫『日本の教育システム・構造と変動』東京大学出版会、1996、p.25.
- (2) 落合信彦『日本の正体』小学館、1999、p.18.
- (3) ロナルド・ドーア『21世紀は個人主義の時代か』サイマル出版会、1991.
- (4) 同、p.61.
- (5) 同、p.61.